

(政務活動費用)

(様式1)

出張報告書

令和3年12月18日

鉏路市議会議長 松永 征明 様

会派名 自民市政クラブ

代表者名 草島 守之



次のとおり、政務活動費による出張を終えましたので報告します。

受命者	草島 守之、高橋 一彦、大澤 恵介、伊東 尚悟、山口 光信
出張先	仙台市、石巻市、陸前高田市及び気仙沼市周辺
期間	令和3年11月16日～令和3年11月19日
用務	①せんだいメディアテーク現地視察 ②「全国 鯨フォーラム2021 石巻」参加 ③陸前高田市及び気仙沼市周辺復興状況視察
調査(研修)結果等の概要	別紙参照
備考	

- 注) 1 資料等がある場合、添付すること。資料は、事務局経由で会派へ返却するので、本出張報告書(原本)とともに会派で保管すること。
- 2 調査結果等の概要は、別紙による記載も認める。

せんだいメディアテーク視察報告

○日時

令和3年11月17日（水）9:30～11:00

○対応

仙台市役所

せんだいメディアテーク

○報告

先日わが会派は仙台市の「せんだいメディアテーク」を視察して参りました。せんだいメディアテークは、仙台市図書館、イベントスペース、ギャラリー、スタジオなどからなる地上7階建ての公共施設です。美術や映像文化の活動拠点として、2001年に開館し、様々なメディアによる情報を収集、保管し、それらを市民に提供すること、また、美術や映像に関わる文化活動の場となることを目的として、せんだいメディアテークは設置されました。運営は公益財団法人仙台市市民文化事業団が仙台市から指定管理を受け、おこなっております。

施設内には、様々な設備が備わっており、ギャラリー、シアターでは美術作品・映像作品の発表や鑑賞が頻繁に行われており、スタジオでは映像音楽制作や情報発信が行われています。そして施設の2フロアを使って仙台市立図書館が運営されており、各種事業との相乗効果を生み、図書館の利用拡大が図られております。

他にも仙台メディアテークの事業である「3がつ11にちをわすれないためにセンター」では市民、専門家、アーティストと協働し、東日本大震災とその復旧・復興のプロセスを独自に記録・発信していくための事業で、2階ライブラリーと呼ばれるフロアには、個人個人が体験した震災やそれにまつわることがらを映像、写真、音声、テキストなどで記録、展示されています。それらの記録は「震災の記録・市民協働アーカイブ」として整理・保存され、ウェブサイトでの公開、ライブラリーへの配架（パネルやDVD）、展示や上映会の開催、さらには記録を囲み語る場づくりなど、さまざまな形で利活用されています。地元のアーティストや市民の表現の場を創出すると同時に、震災の記憶を風化させずに地域への思いを育む、まさにせんだいメディアテークがひとつとまちをつないでいる事業であると感じました。

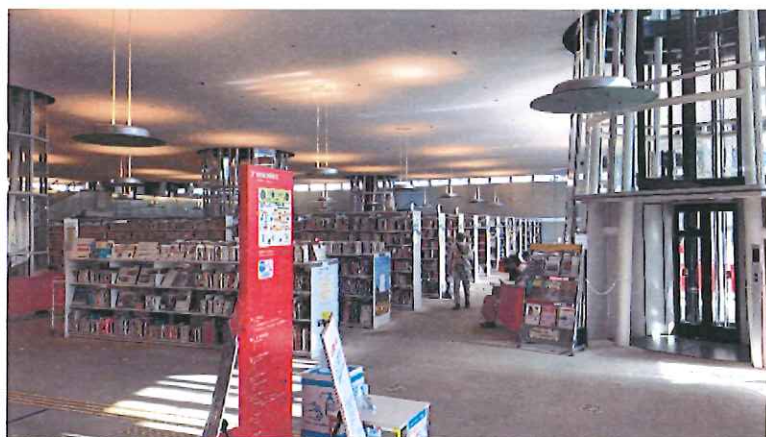
釧路市中央図書館は2018年2月の旧図書館からの移転リニューアルより、来年で4年を迎えようとしております。利用状況を見ますと、去年はコロナの影響により落ち込んでおりますが、移転した平成30年は21万人と移転前の約2倍の方にご利用いただいております。2019年に釧路公立大学地域経済研究センターが行った、中央図書館周辺の通行量調査や中央図書館利用者へのアンケート調査によると、利用者の平均消費単価は1146円、経済波及効果は全体で2億3,660万円と試算されています。このように北大通への移転により、中心市街地へ人流を生み出し一定の経済効果を生んでおります。しかし、

中心市街地の活性化はまだ実感ができる状況ではなく、更に多くの方に利用して頂き、にぎわいを生み出して頂くことが期待されます。また、利用人数の増加に対し、貸出冊数は旧図書館時代と変わらず推移しており、そうした観点からも利用拡大への取り組みが必要な状況であると考えます。

鉏路市中央図書館においても、商店街をはじめ地域の方々との様々な連携など、これまでも取り組まれておりますが、地域と人、図書館の持つ機能とうまく結びつけることで、色々な方を巻き込み、図書館を中心にした交流拠点を作ることができると思います。こうした視点でつながりをさらに充実させていくことで、利用拡大にもつながると考えます。さらにせんだいメディアテークはすべてのバリアフリーを重要な理念に位置付けております。

障害を持つ方が利用しやすい環境を整えることはもちろんのこと、健常者と障がい者がお互いの違いを理解し尊重することを大事にしているとのことでした。

鉏路市中央図書館においても障害のある方が利用できる環境整備を行っておりますが、鉏路市身体障害者福祉センター内の点字図書館には点字図書やデイジー図書があり、視覚障害のある方はそちらを利用される方も多くおられると思います。健常者と障害者を住み分けだけでなく、対面朗読など様々な事業を通じてお互いがすみよい社会への理解を深める場を作ることができるのではないかと感じました。



全国鯨フォーラム 2021 石巻

開催趣旨

捕鯨に縁のある全国 33 自治体で構成される「捕鯨を守る全国自治体連絡協議会」では捕鯨文化の継承・普及啓発を主眼においた全国鯨フォーラムを加盟自治体で毎年開催している。令和元年 7 月に、およそ 30 年ぶりに商業捕鯨が再開されたが、商業捕鯨禁止の期間が長期に及んだことにより、捕鯨への理解低迷、鯨食離れが進んでおり、今後の捕鯨業を将来に渡って維持していくためには、各種の振興策が必要となる。鯨フォーラムは関係自治体が課題を共有し、連携して捕鯨の振興を図り、各地の鯨文化を理解するものである。今年度のフォーラムは、石巻市が開催し関連イベントとして市民向けイベントも実施し、捕鯨文化の啓発、鯨食普及を図る。

主催

石巻市、石巻くじら振興協議会

開催日及び場所

鯨フォーラム 令和 3 年 11 月 17 日（水） マルホンまきあーとテラス 13 時 30 分～17 時

- ・開会（主催者挨拶他）
- ・震災復興報告
- ・基調講演「我が国商業捕鯨の今後の展望」水産庁資源管理部 参事官 諸貫 秀樹氏
日本はなぜ IWC を脱退したのか？国際捕鯨取締条約、鯨族の適当な保存を図って、捕鯨産業の秩序のある発展（＝持続的活用）という条約だが、現在の IWC は、活用ではなく、反捕鯨国は保護のみと捕鯨を禁止する内容に変わってきており、日本が求めていた捕鯨産業の秩序と発展が叶わなくなると考え、脱退をしたとのこと、現在は IWC を脱退はしたものの連携しながら意見交換等を行っているとのこと。
- ・石巻の捕鯨 動画放映
- ・パネルディスカッション「くじらを活かした地域振興」

パネルディスカッションでは、くじらを活かした地域振興と題して、くじらによる食文化の普及がメインで話されており、今後釧路地域においても食文化の普及を進め、全道・全国へ魅力を高める活動が必要と感じました。



陸前高田市及び気仙沼市周辺復興状況視察

2011年3月11日に発生した東日本大震災により東日本の太平洋沿岸500kmにも及ぶ広い範囲が甚大な被害を受けました。その惨状から被災地では一日も早い復興への取り組み、そして被災の現状と教訓を伝えて行くための施設の整備が進められるとともに、大切な命を守るためにこの出来事を風化させてはならないと、強い使命に燃える地元有志による語り部の姿がありました。

日本では近年地震や水害などの大規模な自然災害が頻繁し、北海道及び釧路市においても地震・津波をはじめ地球温暖化による異常気象によって記録的な猛暑や集中豪雨、強い勢力のまま近づく台風。そして冬には暴風雪をもたらす猛烈な低気圧の来襲など、自然災害リスクの高まりを見せる中過去の災害の知識があれば命を失わずに済んだケースも多く見受けられ、堤防などのハードの整備と併せ一人一人が適切な意識を持って行動をとる「防災意識社会」の実現が求められています。そのようなことから被災地の復興状況と震災伝承施設を視察することは、当地域の防災・減災対策を進める上で最も重要なことと考えます

一方、被災地にある震災津波伝承施設は多数の県にまたがる広大なエリアに数多く散在することから今回は時間的制約上、高田松原津波復興記念公園である国営追悼・記念施設を中心に行いました。ここは震災による犠牲者への追悼と鎮魂、震災の記憶と教訓の後世への伝承とともに国内外に向けて復興に対する強い意志を発信するため、国と地方公共団体が連携して復興の象徴となる「復興記念公園」を整備し、その中心に国営追悼記念施設が配置されています。正面入口に立つと右側に道の駅 高田松原、左側には東日本大震災津波伝承館となっており、伝承館は令和元年9月22日の開館以来2年が経過し、令和3年9月21日に来館者数が40万人を超えております。

足を進めると最初のエントランスは公園、陸前高田市街地、三陸沿岸地域、3・11伝承ロード等の情報を提供。次にゾーン1では「歴史をひもとく」テーマから津波災害を歴史的・科学的視点から紐解くため、古来、育まれてきた知恵や技術、文化を見つめ直し、自然とともに暮らすということを改めて考える。ゾーン2では「事実を知る」被災した実際の物では被災した無残な消防車両が目に飛び込んできました。被災の現場を捉えた写真、被災者の声・記録などを通して東日本大震災津波の事実を見つめる。一訪れる人々に改めて当時の悲惨な状況が甦る一。ゾーン3では「教訓に学ぶ」逃げる・助ける・支えるなど、震災津波の時の人々の行動を紐解くことで命を守るための教訓を共有する。一この悲惨な犠牲を無駄にせず、釧路市民の生命を守らなければならないと私達も決意する一。

ゾーン4では「復興を共に進める」国内外から頂いている多くのご支援に対する感謝の気持ちとともに、震災を乗り越えて前へと進んでいく被災地の姿を伝えています。

これより追悼の広場へ向かう前に私達を出迎えるのは「大屋根のファサード」祈りと鎮魂の意味合いを込めて白い一本のラインとして清澄な美しさを得るようデザインされ、ホワイトコンクリートのパネルには間接照明が配置され空いた穴の数は東日本大震災の犠牲者数を表し、夜間には18434の燈が灯ります。

いよいよ屋外へ出て目に入るのは「トップライトと水景施設」これには復興の軸と祈りの軸の交わりには光を取り入れるとトップライトと水盤があり、国営追悼・記念施設を訪れた人々の気持ちを静めるための場となっています。さらに進むと芝生広場には「献花の場」が設置され祈りの軸と奇跡の一本松～タピック45を結ぶ線の交点に位置し、海に向かって開けた空間の中で来訪者が花を手向ける場となっています。—私達も手を合わせそれぞれの思いを込め祈りを捧げる—

さらに進み川原川の橋を渡り「海を望む場」へ到着。ここは祈りの軸の終点として津波が押し寄せた広田湾や再生して行く名勝高田松原、高田の市街地や郷土の山々を広く望むことができる場所で、防潮堤の高さは12.5mとなっています。この高台から進んできた道を振り返ると追悼の広場を望み、改めて犠牲者への追悼と鎮魂の想いを強くしました。そして右側には震災伝承施設の④旧道の駅タピック45、さらに遠くには同じく⑤下宿定住促進住宅を眺め次なる場所へ。震災伝承施設③陸前高田ユースホステル、高田松原の中に建っていた宿泊施設で、奇跡の一本松はこの建物のおかげで津波の直撃を免れたとも言われています。同じく後ろに存在する②奇跡の一本松約7万本の松の中で唯一残り復興のシンボルとなりましたが、震災の翌年に枯死したことからモニュメントとして現在は保存されている。最後に少し離れた位置にある同じく①気仙中学校、この生徒は直ちに高台に避難し全員無事でしたが、鉄筋コンクリート三階建ての校舎は屋上まで津波で水没しています。—このようなことから津波の破壊力と人智を超えた自然災害の恐ろしさを感じたところです—

次に中心市街地「まちなか」を視察。ここも被災後約10mのかさ上げを施し、「アパッセたかた」を中心に広がっているのが陸前高田の中心市街地で、駅・図書館・博物館・講演などの公共施設や、商店・飲食店・居酒屋にバーやスナックなどの商業施設がコンパクトにまとまっているため、徒歩で充分周遊できる賑わいのエリアでもあります。そこで私達も昼食を取ろうと何件か歩いたのですが満員で入れず、場所を変えることになり気仙沼市街へ戻る。

ここも海岸線の堤防の整備が進み、併せて漁港関連施設も復興が行われ、その一角に復興を願う地元住民が運営する復興食堂街へ足を運びました。注文はサンマ定食、釧路でもなかなか食するのが難しいメニューをとりましたが1000円ほどで充分満足な内容でした。

行き帰りの車窓から見るだけでなく大きな変貌に、時として車を止め現地に足を踏み入れた被災地の現況は、私達をスムーズに移動を可能にした復興道路は整備も進み、令和三年度内には全線開通の見込みで三陸鉄道リアス線もすでに運行されています。そして一番の驚きは、被災当時現地に積み上げられていた災害廃棄物は姿を消し宅地整備も全区画が完了していました。

景観が低下する中で防潮堤をはじめとする海岸保全施設の復旧・整備も9割程度まで進み、このようにハード面では目に見える形で以前より立派に再建される一方で、ソフト面での復興は何処まで効果を出しているのでしょうか。地元住民が願う従来の人々の賑わいの復興を思う時、いまだ厳しい状況と感じたのは私だけでしょうか。

今後の推移を見守りながら釧路市政に生かして行きたい。

